

# 「家がいいね」 第170号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2018.7.6



「すべて世はこともなし」という言葉が浮かぶ。詩の冒頭はこうだったか。「時は春、日は朝、朝は七時。片岡に露みちて・・・」と続く。人は小さい存在です。

共に小さき命を支えるため、お約束とお願い

現在、50名ほどの在宅患者さんの自宅を訪問しています。皆さんに体調の変化があった場合は、私と同行看護師が把握し、ケアマネや訪問看護師と協力しケアに当たります。この普段の態勢ができなくなるのが、地震津波など大規模災害の時です。私たち医療者も被害をこうむり、対応するまでに時を要するでしょうが、必ず連絡を取ります。

- ①まず安全だったか現状確認を、させてください。電話も混乱しますので「災害用伝言ダイヤル」の1711番を利用しましょう。家族や親類も利用できます。毎月1日と15日が練習可能な日です。
- ②次に、慌てて避難せずに連絡と相談をください。動ける人でも避難経路は危険で、避難場所も混雑して適切なケアが受けにくい状況と恐れられます。
- ③災害時に自宅を利用する備えを考えましょう。ケアの必要品や薬を分りやすい場所に確保します。医療機器を必要とする人は、内部バッテリー確認や、非常用電源(車)から補充法を考えましょう。
- ④普段から、この模擬相談は繰り返ししましょう。
- ⑤私たちが訪問先で災害に遭った時のお願い

その家の患者さんとご家族の基本的な安全を確保した上で、心苦しいですが退去します。他の患者さんやご家族のためにも、全体状況を把握している者の責任として安全に戻らなければなりません。

## 高齢の在宅医の役割

一回り年長(80歳)の小堀鷗一郎医師の近著を読了しました。祖父が森鷗外とのこと。13年前に、初めて在宅医療というジャンルがあることを知り、病院と自宅との間を行き来する人の生活と意思を丁寧に聴き取られ、42例の事例として文にしておられます。それは医療者というより、佳き隣人というスタイルのようにも思えます。

私も感じる

疑問がそこに。  
死ぬ事を考えない時代背景の中で、自らの死を表明できないことが続いています。

病院医師の間では、「死ぬ事が分っているのに、なぜ家に帰るの」という違和感が強いのです。

私も小堀医師も、それでも「家がいいね」と、つぶやく人の声を聴き取り続けたいと思います。次号より、身近な咳きを小欄にて掲載します。

## この先の休診日のお知らせ

研究会で臨時休診  
7月21日(土)

お盆期間

8月11日(土) から

8月16日(木) まで

研究会のため休診

9月14日(金) から

9月17日(月) まで

この期間中も、在宅の患者様には対応いたします。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
メール [homecare@kr.tep-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tep-ip.or.jp)  
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可